

# 地域教育 シンポジウム

5月20日、島前高校の魅力化構想実現に向け、藤原県教育長や山根教育委員長を始め、県の教育や地位振興の関係者をお招きし、地域教育シンポジウムをマリポートホテル海士にて開催しました。主催は「隠岐島前高等学校の魅力化と永遠の発展の会」ですが、一般の方々にも案内をして、**高校魅力化の現状や課題、思いなどを語っていただきました**。非常に充実した会となり、「今回参加できなかった人たちにも内容を共有して欲しい」という声を複数いただきましたので、今回まとめて島前の皆さんに紹介したいと思います。

## 地域教育シンポジウム内容要約

### 藤原義光さん(島根県教育長)

私はこういう現場に出かけていくのが大好き。今回は島前地域にエールを贈る役目で来た。

島前高校は島前の振興にとって欠かせない存在。この地域への定住条件として、島前高校はなくてはならない。生徒数の減少の中でどう教育水準を維持向上していくか、どう生徒数を確保していくか、考えていかなければいけない。

この島前高校の魅力化構想は戦術的にみても非常に良い。島前高校も本当は1学年2クラスだと、国基準の教員数も増えて良い。ただ、現状の1クラスの中でどうするか。何とか県の単独の財源を使ってでも、**教員を確保**できないか折衝している。寮ももっと弾力的に有効利用できるように検討してもらっている。

学校の予算はほとんどが教師の人件費。県外から10人の生徒が入学したとしても、コストはほとんど変わらない。だから、県立高校が、県のお金で、県外からの生徒を入れるのはおかしいという論理は成り立たない。逆に生徒が増えたほうが地域の活性化につながる。**来年の4月からの入学生を確保**するためにも、今年の夏ぐらいから呼びかけられるように、その時期には話が決まりPRしていけるように進めていきたい。

地域振興は、自然の「生命」、その恵みをいただく営みとしての「生産」、それを享受する「生活」の三つの生に目を向ける必要がある。これが地域振興をやって来て私が行き着いた到達点。20世紀は田舎から都市に人口が流出。しかしその都市では市場原理主義により極端な勝ち組や負け組などの社会病理が多く出てきた。21世紀は価値観を変え、田舎に向かう逆のベクトルが必要。伝統・文化や自然がある田舎の価値を再評価しなければならない。

こうした考え方を教育に取り入れて表現するとどうなるのか。それが、「感性を磨けば人生が楽しくなる、知性を高めれば人生が豊かになる」だ。教育とはこの感性と知性を高める営みである。その感性と知性を高める場としての田舎の持つ教育価値の再評価が必要だといえる。幸いに、こうした動きが国にも出てきている。その一つが「食育」。食育基本法(特に2条、3条、7条)を読めばその理念がわかる。この理念を大切にしていけるべき。また、新しい学習指導要領に「言語は感性の基盤」「伝統文化の教育は国際社会で活躍する日本人の育成のため」と書かれている。こうした新たな国のビジョンを推し進めるための**重要な教育資源がこの地域にはたくさんある**。

### 進行(宮崎稔さん 学校と地域の融合教育研究会会長)



都会の中で多くの人たちが悩み、壊れている。人が人らしく暮らし育まれるのが島前のような地域ではないか。そうした中で、島前高校の実情は？

### 石田和也さん(島前高校 校長)

S51年ごろには約300人の生徒がいたが、今は91人。生徒は純朴、素直で能力は高い。普通科だが、就職、短大専門など進路のニーズは多岐にわたる。国公立大学にも20年度は3名合格している。

生徒に「離島だから十分な教育が受けられない。進学ができない」と言わせるようなことにはしたくない。そのためにも教員一同がんばっている。

本土の大規模校と違い、実習助手やPTA雇いのスタッフがいない中、町から事務スタッフと司書を派遣してもらっており、助かっている。ただ、島前地域内で家庭科の教員が確保できず、家庭科は週一回、隠岐養護学校の先生に島後から来てもらっている。今後2コースに分け、食文化や看護福祉、保育を学べるようにするためにも、家庭科の教員が必要。

島前高校へ最初に来たときは、魅力化の話などを聞き「大変なところに来てしまった」と思ったが、今は地域の想いに応え、地域のために取り組みたいと思っている。

### 武藤立樹さん(島前高校 教諭)

1回目の島前高勤務は晴天の霹靂だった。今回、2回目の赴任として、戻れて良かった。今の先生方は、10年前よりまじめで、朝早くから夜高校が閉まるまで、よく働いている。管理職も現場で実際に生徒と関わってくれる。

以前、生徒に「僕たち、島の子だからしょうがない。」と言われたことがある。生徒に二度とこんなことを言わせたくない。その思いで、今は生徒と向き合っている。



進行 こんな熱い気持ちを持った先生方がおられる島前高校ですが、親から見たら高校はどうか？

### 松前一孝さん(島前高校 PTA 会長)

子どもは肌で良さを感じるようで、去年から学校の悪い話を子どもから聴いていない。先生が良いと言う。先生方は大変だとつくづく感じるが、とても良くやってくれている。先生の質も高校の魅力の一つだと思うので、少ない教員数だが、先生の質も維持向上して欲しい。

魅力化においては保護者の考え方も重要。やはり高校までは地元で子どもを育てられるのが理想。地元の高校の意義を見直す必要がある。その中で進学が重要になる。魅力化の活動の中で島前高校への関心が高まっており、最近の盛り上がりはすごい。学校任せではなく地域や保護者としても、構想実現に向けて行動していきたい。



進行 OBとしてはどうか？

### 浜見敏明さん(隠岐島前高等学校 家督会副会長)

生徒数が減っていくなかで島前高の状態を危惧していた。今までの家督会の活動は高校への資金支援が中心だったが、魅力化構想の中で会も何かできないかと思う。例えば、島外にいるOBOGへのネットワークを使って、島前高校のPRを行い、島外からの生徒数確保につなげるなど。

教員の確保にむけ、国の標準法の問題があると聞いたが、昭和33年、ここからの発信で国が動き、島前高校は

全国初の全日制分校となった。それによって全国に全日制分校が生まれていったという歴史がある。改正の動きを起こしていきたい。

### 柏原廣行さん(海士町議会副議長)

標準法の壁は、私たちが地域の議員達と力を合わせて島前の魅力化に力を注いでいきたい。

### 藤原教育長

国に向けて、離島振興の見地から、離島教育のアピールをしていきましょう。

### 近藤安子さん(島前高校PTA 副会長)

今までの西ノ島の保護者は、「島前高校に行くのも、島後や本土の高校に行くのも、海を渡ることには変わらない。どうせなら松江に行かせたい。」という意識が強かった。自分もそうだった。長男は本土の高校に行った。寮がなかったので授業料の他に、仕送りで月10万ほどかかっていた。2番目の子は島後の隠岐高へ行った。今、3番目の娘が島前高校に就いている。「進度に合わせてクラスが2つに分かれていて、わかるまで教えてもらえる」などその子が島前高は良いという話しを家でする。それを聞いていた4人目が「自分も島前高に行きたい」と言い出した。中学校の先生は「お前の学力があれば松江に行ける」と本土を勧めていた。私が息子に「なんで島前高校に行きたいの」と聞いたら、「隠岐が、島前が好きなんだ。だから、島前高に行きたい。」と答えた。それならば地元の高校に行って、ふるさとのいいところを存分に学んでほしいと思い、4番目も今年島前高に入った。



島前高校は先生が生徒全員を知っているし、親も先生をよく知っている。だから何でも相談できる。小さい学校だからこそその魅力がある。逆に私は子どもを、本土にも島後にも出した経験があるので、その大変さも知っている。最近、西ノ島の保護者にそういった話をする、外でなく島前高に目を向けてくるようになってきた。自分が保護者として何ができるか？私は保護者の立場から他の親さんたちに島前校の魅力をPRしていきたい。広報係として伝えていく。3町村が一緒になって、取り組んでいけるようにがんばりたい。

### 井尻義教さん(知夫村議会副議長)

3町村で一緒に話して取り組んでいくのはとても大事なこと。先日、島前高校に2人の子どもを通わず親と話した。なぜ寮に入れずに毎日送り迎えをするのか聞いたところ、「送り迎えをしても家から通わせた方が安いから」という答えだった。ならば島前高校に通いやすくするために、議会で西ノ島も知夫も内航船の運賃を無料になるくらい安くできたらと思う。寮も入りやすくなるよう、安くできたらいい。

子どもを持った若い家族に知夫へ来てもらえるよう、定住対策として見ても、学校の生徒確保は大切。それが産業にも返ってくる。村をあげてやっていくし、島前高への進学を勧めたいと思う。



### 伊藤由紀子さん(Iターン者)

3年前に子ども3人連れて島前へIターンした。子どもは18歳までは親元で育てたいと思っていた。どの島に移住するか迷ったが高校があることがIターンの決め手になった。ただ、高校の情報がHPにあまり出てなくて残念だった。



一時期、島前高校がこの先なくなるかもしれないという噂があった。島前高が無くなったらどうしようかと夫婦で話し合ったが、高校がなくなれば家族で外に出るしかないということになった。他のIターンや保護者も同じようなことを話していた。今は子どもを島前高に行かせてうれしく思っている。島にちゃんと高校があって、そこで**魅力的な教育**ができれば子どもを連れたUIターンがもっと増えるはず。魅力化構想が実現して生徒を確保できる高校であって欲しい。

進行 大人たちは真剣にこんなことを考えているけど、実際の高校生としてはどう思う？

### 大脇政人さん(島前高校生徒)

今日は先生や大人に感動した。本気なのが伝わってきてうれしかった。僕は中3まで本土の高校に行こうと思っていた。中3のときに東京へ行って1000人の前で、自分の夢や地域の夢を語る機会があった。そのとき他の大人たちが本気で夢を語っていたのがかっこよかった。「大人が変われば子どもが変わる。子どもが変われば未来が変わる」と感じた。それで**自分も島前高校を変えたい**と思って入学した。島前高をどうにかしたいと思う。なぜか？自分たちの後輩のため。これからの中学生が入れるように。自分たちが変わらなければ高校がなくなってしまふ。生徒が変われば、高校が変わる。高校が変われば地域が変わる。島前が変われば、島根県が、そして日本が変わっていくと思う。

### 会場から

平成7年ごろにくらべて生徒数は半分に減っており、危惧している。これからは国に働きかけていかなければいけない。

### 山根昊一郎さん(島根県教育委員長)

色々な懇談会やシンポジウムに出てきたが、今日は皆さんの熱意が伝わってきて感動した。高校生の話を聴いて涙が出た。少子化はどの地域にもある構造的な問題。この島は高校だけでなく、**産業や地域の振興にまで目を向けて**考えているところがすごい。Iターンも多く、**地域資源や魅力にあふれている地域**なんだろうと思う。感銘深いシンポジウムに感謝しています。今後も粘り強く取り組んでいって欲しい。

### 進行

今回のシンポジウムは島前高校の話に留まらず、島前地域全体の話になった。最後に一言お願いします。

### 藤原教育長

最初に教員を県単でもと言ったが、教員の確保に関しては、そのぐらい**背水の陣でやりたい**。ただ、地域が必要とする学校、地域が支える学校であり、地域や高校が明るくなければ島外からの生徒や人も入ってこない。状況は至って深刻だし、深く考えることが必要。ただし、いくら厳しい状況であろうとも、**地域振興は明るくやっていくことがポイントだ**。



#### 担当者

隠岐島前高等学校の魅力化と永遠の発展の会 事務局  
島前高等学校 派遣社会教育主事 浜板 健一  
Tel 08514-2-0731 Fax 08514-2-0035  
Eメール dozen-01@shimanet.ed.jp